つつがなく生きるための
人間学のキーワード

# 生権力
## Bio-politics

加藤敦典（かとうあつふみ）　東京大学
東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ特任講師

権力というと、一般的には、地位や権限を利用して他人に何かを強制することなどをイメージする。しかし、権力というものは、もっと巧妙にそれとわからないようなかたちでも作動している。

フランスの哲学者ミシェル・フーコー（一九二六―八四）は、近代社会になってひとつの微細な権力装置のかたちがあらわれたことを指摘した。それが生権力（せいけんりょく）である。近代社会において、国家はもはや王家や将軍の持ちものではなくなり、自立したひとつの有機的生命体のようなものだと見なされるようになった。そして、国家は自分自身を維持・拡大することを自己目的にするようになった。同時に、国民は国王が生殺与奪の権力を振りかざして、おどしたり調教したりする対象ではなくなり、国家＝社会という生命体を維持・発展させるための不可欠の要素だとみなされるようになる。そのため、近代国民国家は、こぞって国民の健康を増進し、性生活と生殖活動の管理をおこなうようになっていく。とりわけ、性の管理はその典型である。さまざまな「性倒錯」（自慰や同性愛など）は、国民の健康を害する問題と見なされるようになる。人びとは、これらの行為を見とがめられるだけではなく、そういった異常な性癖をもっていないかどうかを自分自身で吟味し、告白し、相談するように仕向けられていった。

このような生権力は、一般に「生かす権力」だと言われる。たしかに、生権力は「言うことを聞かなければ殺す」というような物騒な権力ではない。つつがなく生きたいという人びとの思いをやさしく包摂する権力であり、親切で、ときにお節介な権力である。しかし、歴史的な事実としてみたとき、このような生権力はしばしば暴力的なかたちでエスカレートすることがあった。たとえば、ホロコーストがその典型である。ホロコーストの思想は、国民の優秀さを増大するためには人種の純粋さを高めなければいけない、そのためにはユダヤ人種を根絶やしにしたほうがよい、という考え方を背景にしていた。このような考え方は、やがて、狭義の人種だけではなく、身体障害者、精神障害者などといった優生学的リスクを根絶やしにしようとしはじめる。

今日の文化人類学者は、現地の人びとに対して実施される医療や公衆衛生の思想と実践のありかたを描きだすことで、文明化、近代化、リスク管理などの名目のもとで行使される生権力に警鐘を鳴らしてきた。また、他方では、一人一人の生を国家＝社会の防衛などより大切にする思想と、それを担保する信念や慣行や創発的な実践が実際の人びとの暮らしのなかに生き生きとして存在していることを明らかにしてきた。実際、多くの自生的なコミュニティは「異常」者を排除せず、むしろ包摂していくような機構をそなえているものである。このように、文化人類学者は、実地調査に基づいて、周縁世界における生権力の展開を描きだすとともに、生権力がとらえきることのできない、よりゆるやかな生の作法のありかたを提示してきたといえるだろう。